doi：10.20776/S13482084-68-P185
千葉大学教育学部研究紀要　第68巻　185～196頁（2020）

海外の教員に対する短期滞在型教育研修プログラムの開発と実施
－高等教育の輸出の検討－

大嶌竜午*・加藤徹也・小山義徳・梅田克樹・
澤邉正人・大和政秀・辻耕治

*千葉大学教育学部

Developing and implementing a short-term training program in Japan for in-service teachers from oversea

OSHIMA Ryugo, KATO Tetsuya, OYAMA Yoshinori, UMEDA Katsuki, SAWABE Masato, YAMATO Masahide, TSUJI Koji

*Faculty of Education, Chiba University, Japan

インドネシアの教員等に対する研修プログラムを開発し，実施した。本研究の目的は，参加者及び協力校教員に対するアンケート結果を基に本プログラムを評価し，教育学部における高等教育の輸出について示唆を得ることである。プログラム参加者は，主にインドネシア西ジャワ州に所属する幼稚園から高等学校までの教員43名であり，プログラムは，千葉大学教育学部における講義及び千葉県内の７つの高等学校等における学校訪問から構成された。分析の結果，①国際プログラムにおけるコミュニケーション，②研修内容，③異文化への対応，④学校との連携の在り方，⑤高等教育機関としてのプログラム提供方針に関して，示唆を得ることができた。

キーワード：日本型教育（Japanese-style education），教員研修プログラム（In-service teacher training），
高等教育の輸出（Export of higher education），グローバル化（Globalization），インドネシア（Indonesia）

1　はじめに

グローバル化へ対応できる教員を育成するために，学生[1]や現職教員[2]を対象とした海外派遣プログラムの開発，グローバル化時代における教員養成課程[3]及び教職大学院[4]の検討などがなされている。このような取り組みの必要は，グローバル化への対応力あるいはグローバル社会において求められる教育力の育成という要素が，これまでの教員養成において不足していたことを意味するだろう。アメリカや，オーストラリア，イギリス，フランスなどでは，留学生の受け入れ等，すでに高等教育の輸出としてグローバル化に対応した教育インフラが整っている状況（永田，2015）であり，日本は，教育におけるグローバル化に関して後進国と言わざるを得ない。

その一方で，国際調査における日本の児童生徒の高い学力到達度（国立教育政策研究所，2016）や，規律のある学校文化など，日本の教育は海外にとって魅力的であるとされる。その魅力の発信を後押しするために，文部科学省の日本型教育の海外展開推進事業が実施されている（文部科学省）。日本では，教育を産業として見做すことはタブー視される傾向にあるものの，高額な金銭的負担に見合う質の高いサービスの提供が不可欠になることから，高等教育の輸出への対応によって，教育の質の向上が期待される。このような観点において，教育の海外展開は根本的に重要となる（田中，2014）。日本型教育の海外展開推進事業でも，日本のカリキュラムの国際通用性の向上，教職員の資質向上等が，プログラムの目標の一部として掲げられている。

このような状況において千葉大学教育学部は，インドネシアの西ジャワ州教育局との４年にわたる交渉の末，教員研修プログラムの開発を依頼され，2018年11月に43名の教員らに対して実施した。必要な経費は全て依頼先の負担で行われた点において，ユニークである。本研究では，開発したプログラムに関する参加者および学校訪問協力校教員による評価を分析することで，海外の教員のための学校教育研修プログラム開発への示唆を得ることを目的とする。

2　研修プログラムの開発

本プログラムは，インドネシアのバンドン工科大学の仲介，そして西ジャワ州教育局の依頼に基づき，千葉大学教育学部によって開発及び実施された。2015年に本プログラムに関する最初の会議がインドネシアで開催され,2018年11月１日及び２日に43名（他１名はビザ手続きの問題により不参加）の参加者を対象に，千葉大学及び千葉県内の中学校，高等学校，特別支援学校にてプログラムが実施された。

連絡先著者：ryugo.oshima@chiba-u.jp

2.1　プログラム実施体制

本プログラムの実施体制は図１の通りである。千葉大学教育学部とインドネシア西ジャワ州教育局が協定を結び，西ジャワ州教育局が全経費を負担し，千葉大学教育学部がプログラムの開発及び実施を担当した（図１）。西ジャワ州は，首都ジャカルタの東側に位置し，人口約4600万人を抱える。バンドン工科大学を中心に，西ジャワ州にある大学の関係者が，西ジャワ州教育局のアドバイザーとなった。一方，千葉大学側では，千葉県教育庁，千葉市教育委員会の協力の下，千葉県立千葉中・高等学校，千葉県立千葉女子高等学校，千葉県立千葉商業高等学校，千葉県立京葉工業高等学校，千葉県立大網高等学校，千葉県立千葉特別支援学校，千葉市立千葉高等学校から学校受入れに関する協力を得た。また，教職大学院に学生として所属する現職教員との交流のため，教職大学院との連携も図った。

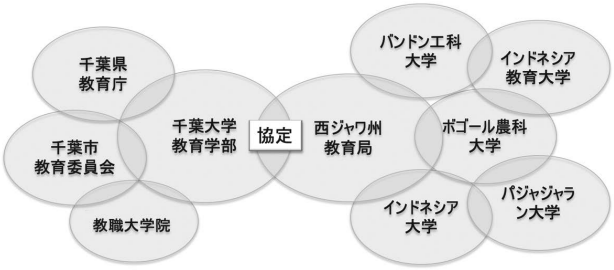

図１　プログラム実施体制

2.2　プログラム参加者

本プログラムの参加者は，西ジャワ州教育局の2018年優秀教員賞受賞者を中心とした43名であった。予定では，参加予定者は44名であったが，１名はビザ手続きの問題のため来日は叶わなかった。表１は，職務による参加者内訳である。表２は，参加者43名の内，西ジャワ州教育局職員及び学校事務の7名を除いた36名の内訳である。また，年齢に関しては，1961年生まれから1989年生まれの参加者までいた。このように参加者の属性は多様であった。

当初の予定では，リーダーとしての活躍が期待されること，英語力が高いこと，40歳以下であることが参加の条件とされていたが，実際には，それらの条件を基に選考されたわけではなかった。そのため，英語力が極めて低い参加者も複数いた。しかしながら，後述するが，非常に熱心にプログラムに参加する姿勢が，本学教員そして受入れ校の教員から評価されるほどであった。

表１　職務による参加者内訳（43名）

	人数
教諭	14
学校長	10
図書館司書・実験助手	5
指導主事	7
西ジャワ州教育局職員	5
学校事務	2

表２　学校種による参加者内訳（36名）

	人数
幼稚園	4
小学校	8
中学校	6
高等学校	8
職業学校	6
特別支援学校	4

2.3　プログラム開発の視点

本プログラムは，当初，理科教員10名ほどを対象とした３週間程度のプログラムとして計画されていたが，西ジャワ州教育局長の突然の交代，予算の変更等を受け，大幅に変更された。しかしながら，プログラム開発の基本的な視点は，一貫して下記のようなものであった。

①【インドネシア側のメリット】日本における教育の理論と実践に触れ，自らの教育に対する考え方を振り返り，教師能力の向上を図ることができるプログラム。

②【日本側のメリット】グローバル人材育成の前提として，小学校から大学までの教員のグローバル対応力の強化が急務である現状の下，経費負担をせずに，日本側の国際教育・研修活動の充実をも図ることができるプログラム。

③【持続可能な受け入れ体制の検討】プログラム実施主体の千葉大学及びプログラムを提供する教員が，適切な対価を得ることで，通常の研究及び教育活動を妨げないプログラム。

①のプログラム依頼者側の要求を満たすことは当然として，②のように日本側のメリットを，千葉大学，千葉県教育庁，千葉市教育委員会と共有し，プログラムの開発に取り組んだ。さらに，継続的な高等教育の輸出等を視野に入れたとき，経費，教員個人の負担等を考慮し保証しなければ，安定した発展は期待できないという考えから，③を設定した。特に海外とのやりとりにおいては，ルールや文化の違い等から，経費において余裕をもってプログラムを計画する必要があると予想されたため，重要な要素として認識された。

2.4　プログラム全体の内容とスケジュール

参加者の旅程は表３の通りであり，千葉大学が担当したのは全体プログラムの内，2018年11月１日と２日の２日間のみであった。宿泊地，バスの手配等，研修プログラム以外の部分に関しては，インドネシアと日本の旅行会社が担当した。来日直前に，来日が遅れ，スケジュールを一日遅らせることが依頼され，急遽対応した。

表３　全体スケジュール

10月30日	深夜便にてジャカルタ出発
10月31日	羽田空港到着，東京泊
11月１日	オリエンテーション
	授業「日本の教育制度」
	授業「授業観察の視点」
11月２日	学校訪問
	交流会，修了証書授与
11月３日	帰国

３　プログラム詳細

3.1　千葉大学でのプログラム

3.1.1　オリエンテーション

オリエンテーションでは，２日間のスケジュールの確認が行われた。特に，学校訪問では，参加者が６グループに分かれてそれぞれ異なる学校に向かうことから入念に確認が行われた。訪問する学校は，普通科，職業高校，特別支援学校というように性質が異なることから，予め西ジャワ州教育局に参加者のグループ分けを依頼し，その通りにグループ分けをした。しかしながら，当日になって訪問先の変更を申し出る参加者が複数いたものの，受入れ校の準備もあるため，基本的に変更を認めなかった。唯一，英語も日本語も話せる人が誰もいないグループに関してのみ，メンバーの入れ替えをした。

学校訪問に関しては，写真撮影時に生徒の顔を写さないこと，そして写真をSNS等に掲載しないことなどの注意点と，各学校でお祈りのためのスペースを準備していることなどを説明した。

3.1.2　授業「日本の教育制度」「授業観察の視点」

いずれの授業も，英語で提供された。「日本の教育制度」に関する授業では，その概要が講義形式で説明された。

「授業観察の視点」に関する授業では，日本の教育課程の変遷について取り上げることで，現在の教育の特質が解説された。当初，一方的に説明するスタイルの資料を準備したものの，参加者の反応が良かったため，授業の途中から，対話型の授業に切り替えて授業が進められた。インドネシア人の教員研修留学生が千葉大学で学んでいたことから，インドネシア人教師の視点から見た日本の学校の特質，及び学校訪問の留意点についての情報提供もなされた。

3.2　各校での研修プログラム

千葉県教育庁および千葉市教育委員会の協力の下，学校での研修プログラムが準備された。スケジュールが変更されたことなどにより，千葉市立の高等学校１校には，１グループのみが，県立高等学校の研修の後に短時間だけ訪問した。

各校での研修プログラム実施の依頼・準備のため，第一に，各校を訪問し学校長及び担当の先生に説明をした。第二に，受入れ校６校が千葉大学に一堂に会して，プログラムの開発及び実施に関する説明をした。予め，各校には各校で実施されるプログラム案を計画してもらい，それに基づいて議論がなされた。この後，各校との具体的なやりとりは，各校への本学引率教員が窓口となって担当した。これらの説明会等における主な内容は，①お祈り時間への配慮，②プログラム後のアンケートへの協力の依頼，③予算措置（手続き），④インドネシア側への依頼の有無（プレゼンテーションの準備，持ち物等），⑤プライバシー配慮事項（特に，学校での写真撮影について），⑥昼食の手配の依頼であった。参加者の多くはイスラム教徒であることが予想されたため，お祈りや食事に配慮することについて，特に共有された。「お祈りのためのスペースは狭くても良いこと」，「必ずしもお祈りの時間に束縛されてプログラムを構成しなくても良いこと」，「昼食は，豚肉が入っていなければ良いこと」など，柔軟に対応することが確認された。

3.2.1　千葉県立千葉中学校・高等学校でのプログラム詳細

日　　時　2018年11月2日㈮　10時から15時45分
訪問人数　西ジャワ州教員研修プログラム研修生６名
主な活動

9:50　タクシーで学校到着。応接室にて校長先生，副校長先生，教頭先生とのミーティング（図２）。学校紹介とともに，本日観察する授業内容の紹介と諸注意がなされた。特に，生徒の写真をSNSに掲載しないことについて，改めて確認がなされた。

図２　校長先生，副校長先生，教頭先生と

10:00　応接室にて，千葉中学校生徒４名による学校紹介。時間割などが英語で紹介され，校歌も披露された。

10:30-11:20　授業参観（高校３年生，生物）希釈平板法を適用した納豆からの納豆菌の分離培養実験。ガスバーナーの炎を用いて実験台に無菌環境を作り，実験が行われていた。納豆パックの中の納豆の豆の数も数え，培養後のコロニー数から，パック内の細菌数を推定する実験。身近な食品を対象とした微生物学実験に研修生も興味を持っていた。

図３　授業参観（書道）

11:25-11:35　お祈りの時間。特別に部屋をご用意いただいた。

11:30-12:20　授業参観（高校１年生，書道）先生がお手本として書く様子がモニターで見られるようになっており，注意点がとても分かり易かった。研修生は字体に興味を持っているようだった（図３）。

12:20-13:00　給食（図４）。食堂で中学生とともに給食をいただいた。６名の研修生はそれぞれ離れて席をとり。中学生と英語で会話をしながらの食事時間となった。メニューにはインドネシア料理をご用意いただき，インドネシアの食事などについても会話が弾んだ模様。

図４　給食（インドネシア料理）

13:15-14:05　授業参観（中学３年生，探求）生徒がそれぞれテーマを決め，グループディスカッションを通して理解を深め，ポスター発表するという授業が展開されていた。今回は特別に英語での内容紹介が準備されており，グループを巡回する研修生と英語での議論がなされた。

14:15-15:05　授業参観（中学３年生，探求）引き続き探求の授業が組まれていたが（図５），前時において内容紹介とディスカッションはほとんど終了しため，研修生主導で中学校のカリキュラム，時間割，授業理解などについて質疑がなされた。さらに，研修生からインドネシアの歌が紹介され，インドネシア語の学びとともに，皆で歌唱する場面もあった。

図５　授業参観（探求）

14:15-15:45　応接室に戻り，校長先生，副校長先生，授業を参観させていただいた先生方と意見交換がなされた（図６）。研修生からは生徒が能動的に参加する授業について提案があったが，高校生になると質問をしなくなっていく傾向があるなどの現状が説明された。参観した生物の授業は実験であり，そのような場面を想定しにくい形態の授業ということもあったと思う。千葉中学校の先生からはインドネシアのカリキュラムについて質問があり，国中で共通カリキュラムが設定されていることなどが説明された。

図６　教員との意見交換

15:45千葉中学校・高等学校を出発し，本千葉－西千葉と電車を用いて帰路についた。

3.2.2　千葉県立千葉女子高等学校でのプログラム詳細

日　　時　2018年11月2日㈮　10時から16時30分

訪問人数　西ジャワ州教員研修プログラム研修生８名

主な活動

9:45　千葉女子高等学校に到着（タクシー２台），控室のＬＬルームへ移動する。

10:00-10:35　校長先生から歓迎の挨拶を頂く。続いて，教頭先生（本プログラムの担当教員）から，図７のように，パワーポイントを用いた，千葉女子高等学校の概要説明があった。高校のパンフレットや各種資料も一人一人に用意されていた。さらに，一日のスケジュールの確認が行われた。

図７　千葉女子校概要説明

10:45-11:35（３校時目授業参観）教頭先生の案内で，数学・古文・現代文の授業を参観した。当日は，千葉女子高等学校に於いて，「千葉県 副校長・教頭 連絡会」が行われていた。校長先生の許可を得て，約10分ほど会の様子を見学した。その後，図書室を訪問した。

11:45-12:35（４校時目授業参観）教頭先生の案内で，パソコンを用いた情報の授業を参観した。12:00 になり，茶道部などが使用する和室の部屋へ移動し，各自お祈りをする。控室に戻り休憩を取る。

12:40-13:10（昼食会）調理室に移動する。そこで，図

８のように，家政科の生徒達が調理した，巻き寿司と落花生を用いたオリジナルフードを生徒達と一緒に頂いた。

図8　生徒による調理と昼食会

図９　校長先生へ記念品

13:20-14:10（５校時目授業参観）教頭先生の案内で，英語・書道・美術の授業を参観した。当日は，校内のホールに於いて，２年生の保護者会が行われていた。校長先生の許可を得て，約10分ほど会の様子を見学した。

14:40-15:10（意見交換）校長先生，教頭先生，及び英語科の２名の教員を交えて，意見交換会を行った。千葉女子高等学校の教育システムや，インドネシアの教育事情などの話題が挙げられた。最後に，インドネシアの教員達から，千葉女子高等学校に記念品が渡された。図９のように，校長先生にお受取り頂いた。

15:30-16:00（部活動見学）教頭先生の案内で，バレーボール部，演劇部，剣道部，なぎなた部を見学した。

16:00-16:25（ティーセレモニー）茶道部の生徒達による，茶道の体験をした（図10）。

16:30　千葉女子高等学校を出発

図10　ティーセレモニー後の様子

3.2.3　千葉県立千葉商業高等学校でのプログラム詳細

日　　時　2018年11月2日㈮　９時40分から16時00分

訪問人数　高校学校教諭５名，教育委員会等２名

主な活動

9:40　タクシーにて学校到着。

10:00　会議室にて歓迎セレモニー。校長・教頭ほか10名強が出席。歓迎の挨拶（校長），双方の自己紹介ののち，学校紹介のビデオ上映がなされた。続いて，研修団からの謝辞があり，質疑応答に入った。日本の学校教育システムや学校運営全般について，研修団から幅広い質問が出た。相当入念な事前学習をしてきたようである。

10:40-11:30　２班に分かれて授業見学。普通教室でのＣ英語ⅡとLL教室での英語表現Ⅰ。インドネシアについての事前学習を済ませており，まず最初に研修団からの自国紹介プレゼンテーション（図11），その後に生徒からの質問タイムとなった。必ずしも英語力が高いとは言えない生徒たちが多くを占める中で，恥ずかしがっている様子，適切な英語がなかなか見つからない様子が見られた。とは言え，大半の生徒たちがインドネシアからの来訪者に相当高い関心を寄せていることが，ひしひしと伝わってきた。

11:40-12:30　校内見学。教頭先生らにご案内いただいて，図書室や生徒相談室，保健室などを見て回った。研修団が特に強い関心を寄せていたのは図書室。蔵書数の充実ぶりに，まず驚いていた。また，ＰＯＰを使うなどして生徒の読書意欲を高めようとする試みは，インドネシアではまず見られないとのこと。西ジャワ州における応用の可能性について，研修団メンバー間で議論する場面も見られた。

12:30-13:15　和室でのお祈りののち，生徒食堂で弁当（事前手配）の昼食。今後の交流拡大を念頭に置いた，積極的な質疑・打ち合わせが行われた。特に，研修団のリーダー格である教育委員会関係者から，矢継ぎ早に質問が続いたのが印象的だった。

13:15-15:05　授業参観。体育（剣道），家庭（調理実習），プログラミング，商業などの授業を見て回った。特に興味深かったのは商業で，生徒たちが10班ほどに分かれて模擬的な会社を経営するという，実際の商慣行等を念頭に置いた実践的授業。また，調理実習における事前学習のきめ細かさにも注目していた。授業間の移動の合間には，学校の人的運営体制や予算規模・内容等についての質疑応答が絶え間なく続いた。その真剣さゆえに，教頭先生の指示により細かな数字が即座に調べられる場面もあり，具体的かつ突っ込んだ議論がなされた。また，生徒自身が掃除をすること，またそれがカリキュラムの一部に組み入れられていることに，研修団は当初より高い関心を寄せていた。その様子を，とても興味深そうに観察していた。

図11 研修生によるインドネシア紹介

15:05-16:00　部活動を見学。情報処理部によるプログラミングのデモンストレーションを見学したのち，柔道部や野球部，弓道部などの運動系部活動を見学した。

千葉商業高校のグラウンドは規模の割にかなり広く，充実した環境でのびのびと部活動に励む生徒たちの姿があった。また，礼節を重んじる日本の部活動のあり方や，部活動の範疇に限らずさまざまな相談を顧問の先生としている場面などを目の当たりにした。

16:00　徒歩にて学校出発。住宅地の中を歩き，住民たちの普段の暮らしぶりを観察しながら，大学に戻った。道中でも，千葉商業高校で見学したことについて議論が尽きなかった。

3.2.4　千葉県立京葉工業高等学校・千葉市立千葉高等学校でのプログラム詳細

訪問先１　千葉県立京葉工業高等学校
日　　時　2018年11月2日㈮　９時15分～14時10分
訪問先２　千葉市立千葉高等学校
日　　時　2018年11月２日㈮　14時20分～15時30分
訪問人数　工業高校教諭・校長・事務員，中学校校長，高校司書，教育委員会各１（計６名）

主な活動（訪問先１）

9:35　京葉工業高校到着。応接室にて，校長，教頭による挨拶。

9:45　引き続き応接室で，学校説明。教務主任により，パワーポイント上の図版資料のほか，生徒らが実習等で作製した電子機器や建造物模型などの現物を用いた説明がなされた。

10:30　英語授業の参観。歓迎の意味を込めて英語教師がインドネシアの言語や文化を紹介する内容となっていた（図12）。オール・イングリッシュで語りかける形で進められ，また参観者に確認するシーンもあり，参加者は生徒たちと一体感をもった。フィリピン国籍，マレーシア国籍の生徒が参観者と直接会話することもあった。

図12　英語授業に参加しインドネシアの自然・文化を説明

11:00　機械科棟へ移動し，機械科３年のひとつのクラスを７人の教員で４分割して進められる少人数講義（原動機・マシニングセンター・特機・制御）を順に参観した。

11:30　工場内へ移動。機械科課題研究参観。英語授業を参観したときのクラスが６班に分かれ，真空エンジン設計・製作や，トライク（三輪車）製作のためのアルゴン溶接（図13），レーザ加工機を用いた模型製作から，ベンチ等の学校備品の修繕や製作などが行われていた。

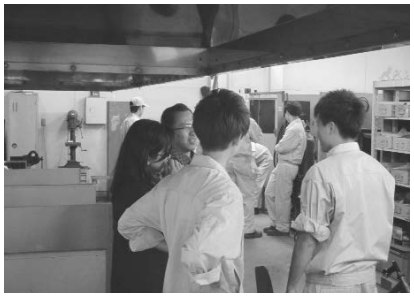

図13　溶接実習で生徒と会話

12:00　建設科棟へ移動し，建設科課題研究参観。生徒が作成した大型の土木模型等を見たあと，校庭へ移動して測量実習を見学した（図14）。測量技術コンテストで上位入賞した生徒による，高機能測量機器の正確な操作により校庭を縦断する距離の測量演示が行われた。

図14　測量する生徒の技術を体験

12:30　校長室へ移動し，昼食会。生徒会長・副会長が加わり会話の上で文化交流をはかったほか，英語授業や溶接実習で特にコミュニケーションをとった外国籍の生徒二人が同席した。

13:20　電子工業科棟へ移動し，電子工業科課題研究での回路模型の作製や，資格試験に向けた実践的な学びなどを参観した。

13:40　図書室へ移動し，室内の状況や司書の活動を視察した。

13:55　最初に通された応接室に戻り，質疑と総括および記念品贈呈が行われた。

14:10タクシー３台に分乗し，移動。

主な活動（訪問先２）

14:20　市立千葉高校に到着。応接室にて教頭と主幹教諭，および千葉市教育委員会指導主事対応し，SSH実施校としての特徴など，学校説明が行われた。

14:40　SSHの活動の軸となる理科研究室や実験室を，生物・化学・物理それぞれ見学した。

15:00　体育館に移動し，この時間帯の生徒の活動状況の見学として運動系の部活動の様子を見学した。

15:10　図書室に移動し，室内の状況や司書の活動を視察した。

15:20最初に通された応接室に戻り，質疑と総括が行われた。

15:30タクシー３台に分乗し，大学へ移動。

3.2.5　県立大網高等学校（農業）でのプログラム詳細

日　　時　2018年11月２日㈮　10時から14時30分

訪問人数　小学校：２名，高校：１名，職業訓練学校：３名，教育委員会等：１名

主な活動

9:50　学校到着：玄関で校長，本プログラムの実務担当教員，英語教員，生徒会生徒に出迎えていただいた。

10:00　歓迎会：出席者は同上の教員・生徒で，校長からの歓迎の挨拶と生徒会代表から学校紹介はそれぞれ英語で行ってくださった。インドネシア側は，英語に日本語を織り交ぜて自己紹介を行った。

10:25　生徒と質疑応答：生徒からインドネシアの文化等について英語で質問を受けた（図15）。

10:40　餅つき体験：訪問校の農場で栽培した餅米を材料に，臼と杵による餅つきを教員・生徒とともに体験した（図16）。

12:00　お祈り：訪問校に手配いただいた部屋や足を洗う場所は，インドネシア側には問題ない様子であった。受入校側も，お祈り習慣・必要な場所等について事前に引率教員説明・依頼しておいたので，ご対応はスムーズであった。

12:20　昼食：弁当に加えて，午前中に自分たちでついた餅を雑煮やおはぎにて供していただいた。食事中，インドネシアと日本の餅の相違点・共通点についての話題で盛り上がった。

13:00　実験動物の実習体験：訪問校の実験動物の飼育室で，マウスやラットを清潔な飼育ケージに移す作業を体験した（図17）。インドネシア側の全員に，この作業への抵抗感は見受けられなかった。作業の指導や施設の説明は，生徒が英語で行ってくださった。

14:05　教員と質疑応答。受入校からは，校長，科長・農場長クラスの先生方３名，本プログラムの実務担当教員がご対応くださった。インドネシア側からの質問内容は，学校で栽培・製造した農産物の販売と収益の分配方法，特別支援を必要とする生徒の在籍状況等，訪問校（日本）でのイネの栽培時期・年間の栽培回数等であった。

14:30　学校出発。同上の質疑応答にご対応いただいた先生方にお見送りいただいた。

図15　生徒と質疑応答

図16　もちつき体験

図17　実験動物の取扱体験

3.2.6　千葉県立千葉特別支援学校でのプログラム詳細

日　　時　2018年11月２日㈮　10時から14時15分

訪問人数　西ジャワ州教員研修プログラム研修生８名

主な活動

10:00タクシーで学校到着。応接室にて教頭先生，担当の先生，そしてインドネシア語が堪能な地域の方１名とのミーティング（図18）。学校紹介とともに，本日観察する授業内容の紹介と諸注意がなされた。特別支援学校では，壁などに名前の代わりに写真が貼られている場合があるなど，写真の取り扱いには，十分に気をつけるよう注意が促された。

図18　教頭先生からの説明

10:25　授業見学開始。小学部，中学部，高等部と順にまわった。文化祭を翌日に控えているため，子どもたちは，文化祭に向けた活動に取り組んでいた。小学部では，ダンス，中学部では，野菜の栽培・かご作り，高等部では，機織り・木工作業などの活動に取り組んでおり，研修生は熱心に観察していた。その間，研修生から多くの質問がなされ，インドネシア語が堪能な地域の方と，引率教員とで通訳して，教員間の交流を促した。カリキュラムについて，教育の質保証について，国などからの資金，一学級当たりの子供の人数及び教師の人数等について，多くの質問がなされていた。

今回の受入れに合わせて，学校全体で，挨拶などの簡単なインドネシア語を勉強していたようで，教室などをまわる際，あるいは廊下ですれ違う際に，教師に促されて，生徒がインドネシア語で交流する場面が多くあり，参加者を喜ばせた。

中学部訪問の際は，自分たちが栽培した野菜などを見せるなど，研修生と生徒が交流した。

11:50-12：15休憩。朝の打ち合わせの際には，昼食後にお祈りをしたいということであったが，少し時間が空いたため，応接室にて20分程度お祈りをした。

12:15-13:00昼食。インドネシア国旗を手に代表の生徒がエスコートして，食堂に向かい（図19），生徒らと

一緒に給食を食べた。お祈りの時間が延びたため，既に食べ終えた生徒も多かった。ここでもおもてなしで，手作りの研修生の名札をテーブルに置き，それぞれの研修生を迎え入れてくれた。訪問直前に，訪問するメンバーが代わったため，急遽，名前を書き換えるなど先生方にご対応いただいた。食事には豚肉は入っていないことを強調したが，研修生１名は，ハラールフードかどうか気になるようで，何度も質問をした。また，給食の量が多いようであった。

図19　インドネシア国旗を手に出迎え

図20　機織り体験

13:00-13:10　休憩。

13:10-13:50　研修生８名が３グループに分かれ，授業に参加した。小学部では，２年１組にて音楽，中学部では，作業学習ということで，クラフトバンドを使ったかご作り，高等部では，作業学習ということで，機織りを行った。引率教員は，機織りグループに同行した。研修生は，機織り体験もさせてもらい，生徒が見本を見せるなどして交流を図った。中には，生徒が作成したバッグが素敵だということで，学校の了解を得て，購入した研修生もいた。

13:50-14:15　質疑応答。研修生からの質問に，教頭先生，ご担当の先生にご回答いただいた。引率教員等が通訳した。生徒の評価などについての質問が続いた。最後に，手作り石けんのお土産をいただいた。

14:15　記念撮影をして，帰路に就いた（図21）。

図21　校門での記念撮影

４　参加者に対するアンケート結果

学校訪問の後，プログラムの感想について，参加者にアンケート調査を実施した。アンケート項目は，選択肢式質問の大問１つ（有効回答：37）と，自由記述による大問２つ（有効回答数：40）であった。参加者の英語能力を考慮して，質問項目はできるだけシンプルなものにした。

表４は，大問１の質問項目に対する結果を示している。質問項目１から４までが大学でのプログラムに関する満足度，質問項目５から10までが学校でのプログラムに関する満足度である。そして，質問項目11から13までが学校でのプログラムに関する一般質問項目である。いずれも，「１：そう思わない」，「２：どちらかと言えばそう思わない」，「３：どちらでもない」，「４：どちらかと言えばそう思う」，「５：そう思う」の５件尺度で回答が求められた。

表４の結果より，参加者は，全体として，大学及び学校でのプログラムに，満足していたことが窺える。プログラムに満足し，積極的に取り組む様子は，例えば，大学での授業において参加者の反応が良く対話型の授業に切り替えたことや，受入れ校の教師から「明確な目的意識をもって来校された」，「質疑応答の質が極めて高い」という評価を得られたことからも裏付けられる。

プログラムに対して，全体として満足が示された一方，比較的「５：そう思う」が少ない項目は，質問項目４と８の「英語でのコミュニケーション」であった。今回の参加者の選抜においては，当初の予定と異なり，英語力は加味されていなかった。そのため，ほぼ英語が話せない，聞き取ることができない，という参加者も複数いた。この点が，これらの質問項目において「５：そう思う」が比較的少ないことの原因として考えられる。それでも，「４：どちらかと言えばそう思う」を合わせると，大学での英語によるコミュニケーションには89.2%（33名）の参加者が満足し，学校での英語によるコミュニケーションにも81.1%（30名）の参加者が満足していた。授業等を提供した講師陣のプレゼンテーションが良かったことに加え，質問項目9,質問項目10において，「４：どちらかと言えばそう思う」，「５：そう思う」を付けた参加者が多いことから，受入れ校の教員の態度や千葉大学の引率教員のサポートが好影響を与えていたことが考えられる。質問項目７「昼食」に関しても満足度は高いものの，「３：どちらでもない」が５名いるのは，宗教上の問題があると考えられる。「豚肉を入れなければ問題ない」という西ジャワ州教育局の説明に従い，食事提供の際の配慮を学校に依頼し，参加者にもこのような対応を説明してきたが，実際の昼食時には，「この肉は何か」，「ハラル認証マークが付いていないが大丈夫か」などの質問等が出ることがあった。西ジャワ州教育局とは合意がなされていたものの，このような点に対応することで，参加者の満足度はさらに上がる可能性がある。

表４　参加者の回答（選択肢式質問部分のみ）（人数）

	質問項目	1	2	3	4	5
1	オリエンテーション	0	0	0	7	30
2	授業「日本の教育制度」	0	0	0	11	26
3	授業「授業観察の視点」	0	0	0	8	29
4	英語でのコミュニケーション	0	0	4	20	13
5	学校訪問全体	0	0	1	7	29
6	授業観察	0	0	1	7	29
7	昼食	0	0	5	4	28
8	英語でのコミュニケーション	0	0	7	20	10
9	ホスピタリティー	0	0	3	7	27
10	千葉大学引率教員のサポート	0	0	0	5	32
11	学校訪問から多くのことを学んだ。	0	0	1	4	32
12	学校訪問を楽しんだ。	0	0	0	4	33
13	日本の教育についてもっと学びたい。	0	0	0	7	30

大問２の質問は,「学校で学んだことを書いてください」,そして大問３は,「もしこのプログラムについてのコメントや意見があれば書いてください」であった。大問2への回答者数は40，大問３への回答者数は34であった。大問２及び大問３の記述をコード化して分類したところ，それぞれ表５と表６のような結果が得られた。ただし，複数のことについて言及している記述は，それぞれ別個にカウントされた。

その結果，学校で学んだこととして，表５より，学習指導方法と学校での規律が多いことが分かった。学校での規律についての言及は，施設がきれいに保たれていること，生徒による掃除，給食指導，ホスピタリティ，協力などの用語とともに多く出現していた。授業観察等による，日本の学習指導方法についての学びに加え，滞在時間は短かったものの，日本の教育文化の一端について参加者は学ぶことができたようである。

表５　学校で学んだことの記述数

学んだこと	記述数(人数)
学習指導方法	23
学校での規律	22
学校経営	3
学校施設	3
その他	10

表６からは，本プログラムを賞賛する記述や，継続を希望する記述が22と最も多く，概ね参加者はプログラムに満足していたことが窺える。少数ではあるが，英語でのコミュニケーションの問題についての意見，参加者自身の英語力が高ければもっと効果的であったという意見，英語でのハンドアウトが欲しかったという意見があった。

表６　参加者によるプログラムへのコメント・意見の記述数

プログラムへのコメント・意見	記述数
本プログラムへの高評価	22
言語力の問題	6
その他	4
学校施設	3
その他	10

５　受入れ校に対するアンケート結果

プログラムの終了後，受入れ校６校にアンケート調査を実施した。５件尺度の選択肢式質問が12,そして最後に「今回プログラムを実施して，全体として，改善を望む点，ご要望等がございましたら，ご自由にお書きください」という自由記述による質問が１つ含まれていた。なお，選択肢式質問の内,７つの質問には，理由を記述する欄も設けた。選択肢式質問項目に対する回答の結果は，表７の通りである。

質問項目１からは，受入れ校教員がプログラムに期待をしていたことが窺える。質問項目２及び３の結果からは，その理由として，教師の研修の場というよりも，生徒の学習の場として捉えられていたことが推察できる。質問項目７，８，９の結果からは，プログラムに対して概ね満足し，その理由もやはり，教員の研修というよりも，生徒の学習の場として機能したためと考えられる。今回は，学校での滞在が一日のみであることから，実際にプログラムに関わった生徒や教師は学校規模に比べて少数であり，かつ活動自体が交流活動程度のものが多かった。そこで，プログラムをより長くする，あるいは活動を深めることで，受入れ校教員の満足度がさらに上げられる可能性が示唆された。

質問項目６の結果からは，外国人相手のプログラムであっても，概ね不安なく準備をしていたことが窺える。受入れ校の多くは，既に国際プログラムの経験があり，このことが不安の軽減につながったと考えられる。また,「宗教，習慣，食等への不安が全くなかったわけではな

いが，そういう部分も含めて異文化理解と考えている」というように，前向きに捉えてもらえたことも要因として挙げられる。「どちらかと言えばそう思う」と回答した学校は，その理由として「訪問者のニーズに合ったプログラムとなっているのかどうか」を挙げており，よりよいプログラムの追究によって不安になっていたようである。

大学側との打ち合わせについては，質問項目５の結果から，概ね満足していたことが窺える。その理由としては，「直接顔を合わせて打ち合わせをした」ことや，「電話でその都度対応できたこと」を挙げる学校があった。「何度か急な変更があったが，そのようなことに対応するのが「プロ」だと考えている」という考えをもった学校もあった。その一方で，プログラム開発・検討に関する具体的なタイムテーブルがあれば，計画等にも役立ったかもしれないという意見が見られた。

質問項目10の結果は広く分散されたが，改善の必要を感じる学校の理由を分析すると，「本年度は，学校祭前ということもあり通常の授業体制で受け入れたが，交流会を設けるなどの工夫を考えていけるとよい」，「今回のプログラムが，生徒や，教職員にどのような形で還元できたか。この点を考察して改善をしていかなければと考える」のように，今後を見据え，より良いプログラムにするための方策についての検討や，国際プログラムの教職員への還元方法についての検討を挙げている場合があり，前向きに国際プログラムについて捉えていることが分かる。

質問11に関しては，「年功序列と役職とのバランスの取り方に，当初戸惑いがあった」という意見や，「授業中に教師と記念撮影をした参加者がいた」という事例が挙げられたが，文化・宗教について，大学等と事前に打ち合わせをしていたことから戸惑うことは少なかったようである。

プログラム全体としての改善を望む点，要望等としては，参加者の低い英語能力によるコミュニケーションの難しさが指摘された。また，予め参加者の質問項目などを集約し学校に伝達することなどが要望として出された。

表７　受入れ校の回答数（選択肢式質問部分のみ）

	質問項目	1	2	3	4	5
1	全体としてプログラムへ，期待をしていた。	0	1	0	4	1
2	生徒への教育という観点で，プログラムへ期待をしていた。	0	1	0	4	1
3	自校の教員の研修という観点で，プログラムへ期待をしていた。	1	3	0	2	0
4	全体としてプログラムの実施に，不安を抱いていた。	1	2	2	1	0
5	大学との打ち合わせ（貴校及び大学での打ち合わせ，大学の引率教員との打ち合わせ）について，改善が必要だ。	2	1	2	0	1
6	プログラムの計画は難しかった。	2	1	2	1	0
7	全体としてプログラムに対して満足している。	0	0	2	3	1
8	生徒への教育という観点で，プログラムに満足している。	0	2	1	1	2
9	自校の教員の研修という観点で，プログラムに満足している。	1	1	3	1	0
10	自校プログラムにおいて，改善すべきだったと思うことがある。	1	1	1	2	1
11	文化・宗教の違い，に戸惑うことがあった。	2	2	0	2	0
12	英語によるコミュニケーションに，苦労した。	0	1	3	2	0

６　示唆

参加者に対するアンケート調査の結果から，参加者は本プログラムに満足した様子が窺えた。西ジャワ州教育局からの突然のプログラムの変更が多々あったが，参加者を満足させるという点においては，本プログラムは成功したといえよう。しかしながら，今後，このような国際プログラムを増やすことが期待されることから，高等教育の輸出という観点から本プログラムを精査し，今後のプログラム開発の示唆を得たい。

6.1　コミュニケーション

今回の参加者の選択において，当初の予定と異なり，英語力は問われなかった。実際，参加者の英語力は，あまり高いものではなく，話せる人でさえ，日本人にとっては聞き取りにくいものであった。このようなことを踏まえ，対話型の授業は難しいと予想された。しかしながら，実際には，大学での授業では，講義形式から対話形式の授業へと変更した。日本人は，人前で話すことを避ける傾向にあるものの，外国人は，たとえ英語力が十分高くなくても，授業への積極的な参加を好む傾向が明らかになった。英語力が低いことが予想される場合でも，相互作用を期待できる対話形式の授業を提供することが，外国人教師のためのプログラムにとっては重要かもしれない。

その一方で，今回のように極短期間の滞在の場合，効率的に交流を図る必要がある。さらに，日本の教師にとってのメリットを考えたときに，英語力が低い参加者のみ

であれば，情報交換等ができずに，日本の受入れ側のメリットはほとんどないことになる。今回のような極めて短期間のプログラム，かつ参加者の英語力が低い場合には，参加者の言語を使用する通訳を入れることで，参加者のみならず，日本側の利点ともなることが示唆される。

6.2　研修内容

参加者の感想として，指導方法について学ぶことができたという言及とともに，学校の規律の良さ及びその指導についての言及が多く見られた。参加者は，特に，時間を守ること，教室等をきれいにすること，生徒が掃除をすることなど，日本にとっては当たり前のことについて，とても感心していたようであった。教科等の指導や学級経営という，教師の役割としての中心的な内容と，学校での規律の保持に関する内容に焦点を当てることで，日本の教育の強みを前面に出したプログラムを開発することが可能になることが示唆された。

6.3　異文化への対応

インドネシア人の大多数はイスラム教徒であり，一日の間に複数回お祈りをすることや，豚肉やアルコールを口にできないことなどから，その対応方法について，西ジャワ州教育局と協議しながら慎重にプログラムを計画した。学校も既に理解している場合があり，豚肉などを除いた料理を提供したり，お祈りのスペースを確保するなどして，参加者を喜ばせた。ただし，少数ではあるが，ハラルフードではないことから，食事をほとんどとらない参加者もいた。もし，先方の文化を全て受け入れてプログラムを提供すれば，日本の良さや文化が矮小化される恐れはあるものの，そのような少数にも配慮して，ハラルフードの弁当を用意するなど，きめ細かな対応をすることで，参加者全員の安全や安心を確保したプログラムとすることが可能になるかもしれない。

6.4　学校との連携の在り方

本プログラムの計画において，千葉県教育庁には，本プログラムを日本の学校の生徒の学習の場として，そして教師の研修の場の一部として活用してもらいたいという考えを示し，共有されていた。そこで，各学校には，プログラムの方針，大まかなプログラム案・スケジュール等を示し，具体的なプログラムの内容に関しては，各学校に委ね，提案されたプログラムについて大学と協議し，実施された。アンケート結果からは，このような基本的な考えが必ずしも学校レベルでは共有されていない場合が見受けられたが，それでも各学校ではきめ細かくプログラムを構築し，参加者は学校のホスピタリティに満足していた。工藤（2017）は，高等学校における国際教育の阻害要因として，「担当できる教員がいない，または少ない」，「教員間の連携や役割分担が難しい」等４点挙げているが，今回の協力校に関しては，学校長のリーダーシップや担当教員の努力があったとは思うが，大学と良い連携を図り，参加者が満足できるプログラムを提供することができた。一方，このようにきめ細かく入念に準備をする日本の学校文化に対して，西ジャワ州教育局とのやりとりにおいては，度重なる変更要求，期限を厳守することに対する意識の低さなどあり，受入れ校として不満のある部分が多々あった。国際プログラムの開発において，より良いプログラムを準備するという観点に加え，予想外のことが起こりうることを明確に共有することで，大学と受入れ校との連携は益々良いものになると考えられる。

6.5　高等教育機関としてのプログラム提供方針

本プログラムは，参加者からの満足度が極めて高く，受入れ校の満足度も比較的高かった。また，大学にとっては，経費を出さずに，かつ授業提供者や引率者には，その時間分についての保証を行った。このような点においては，持続可能なプログラムであり，かつ高等教育の輸出という点においても成果を出せたといえる。その一方で，本学の研究機関としてのメリットは，十分ではなかった。今回のプログラムは，本小論のようにプログラムの開発と今後への示唆という成果は得られたものの，期間が極めて短く，また参加者の学校種・教科・立場が多様だったことから，研究として十分に深めるには難しい点があった。中心的な教科を設定することやプログラムの期間を長くすることによって，参加者の学びのプロセス，日本の生徒や教師の異文化理解や異文化対応能力の向上等についての研究は可能であり，研究機関としてのメリットも十分確保したプログラムの提案が，今後も求められる。

7　おわりに

本研究では，インドネシアの教員等に対して開発した研修プログラムを，参加者及び協力校教員に対するアンケート結果を基に評価した。その結果，プログラム全体として，参加者及び協力校教員ともに満足していたことが明らかになった。このような国際プログラムを，持続可能でより良いものにするために，今後のプログラム開発のための示唆として，さらなる改善点が検討された。これらの示唆を基に，参加者の満足の追求に加え，協力校生徒及び教職員のメリットと，プログラムの開発及び実施を担う高等教育機関のメリットを十分に考慮したプログラムの開発が期待される。

註

1)　例えば，野村純他（2017）「アクティブ・ラーニングを主体とする海外教育インターンシッププログラムの開発と評価―千葉大学ツインクルプログラム受講者の授業観の分析―」，『科学教育研究』，41 (2), pp141-149。

2)　例えば，藤田剛志他（2015）「ASEAN共生時代の科学技術教員のためのリカレント教育プログラムの開発」，『日本科学教育学会年間論文集』，39 (0), pp.199-200。

3)　例えば，大嶌竜午他（2014）「グローバルな視点をもった理科教員養成プログラムの構築－授業構成と学制の取り組みを中心に」－，『千葉大学教育学部研究紀要』，第62巻，pp.209-214。

4)　例えば，長島明純，宮崎猛，三津村正和（2016）「グ

ローバル化時代における教職大学院の役割－全国調査とその分析から－」，『創大教育研究』，第26号，pp.21-31。

参考・引用文献

工藤泰三（2017）「高等学校における国際教育の阻害要因－全国の高等学校を対象としたアンケート調査から－」，『名古屋学院大学論集』，言語・文化編，第28巻，第２号，pp.93-100。

国立教育政策研究所（2016）「OECD生徒の学習到達度調査～2015年調査国際結果の要約」，Retrieved from https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2015/03_result.pdf

田中光晴（2014）「教員養成課程のグローバル化に関する動向」，『東北大学大学院教育学研究科研究年報』，第63集・第１号，pp.245-261。

永田雅啓（2015）「高等教育の輸出産業化と世界の大学ランキング」，『季刊　国際貿易と投資　Autumn』，No.101，pp.81-97。

文部科学省（2019年10月取得）「日本型教育の海外展開推進事業」，Retrieved from https://www.eduport.mext.go.jp